

災害史研究は今に何を伝えるか？

文学部歴史学科日本史専攻の卒業論文の指導を担当するようになって4年目になった。私の専門とする江戸時代史では、このところ災害史に関する卒論を書きたいという学生が多い。いずれも7名のゼミ生の内、昨年度は宝永4年（1707）の富士山噴火に天明3年（1783）の浅間山噴火、宝暦期（1751～64）以降の東北飢饉、今年度は元禄16年（1703）の関東大地震に天明3年の浅間山噴火、江戸城の防火対策。そして来年度のゼミ生では、元禄大地震に、宝永富士山噴火が2名、そして安政2年（1855）の江戸大地震と3年続けて大盛況である。もちろん、こうした災害史に注目が集まっているのは、2011年3月11日の東日本大震災の影響が大きい。それから2か月が経った後のことであるが、私自身が運営しているサイト「情報史料学研究所」(<http://www.ihmlab.net/tweet/>)で、こんな一文を載せてみた。

3月11日の大震災から2か月が過ぎた。神奈川に住んでいる私だが、実はこの時の揺れを体験していない。ちょうど九州は福岡の実家に帰省していた。九州の各地では、明日に開業を控えた九州新幹線の話で沸き立っていた。

この未曾有の大災害を、それが発生した時点からずっとテレビで見ていた。ただただ見ていた。画面の向こうにリアルタイムで流れる光景は、この世のものとは思われなかった。のちに友人は、あの揺れを体験しなかったのは、同時代の人間として残念だといわれたが、そうなのかも知れない。

私自身、研究者として自然災害には人一倍思い入れがあったつもりである。それは農家の出身ということもきっと関係しているであろう。私の専門とする江戸時代では、それこそこうした災害の史料には事欠かない。折りにつけそうした史料をみてきてはいたが、主には洪水に対する治水事業だったり、これから述べる小田原藩の災害復興過程の問題だったりして、正面から被害そのものを取り上げたことなどはなかった。

いずれにしても今回の災害は、これまでのそうした研究の私自身の視点や姿勢の甘さというか、そうしたもののすべてをもう一度真正面から見つめ直すのに十分であったと思う。

(<http://www.ihmlab.net/wp/?p=145>)

この後、2014年に文明研究所の所員に任命されて、3か年計画で「震災復興と文明」というプロジェクトに参加することになり、この宿願、小田原藩政からみた元禄大地震と宝永富士山噴火についてもう一度向き合うことになった。体験しなかったことからその思いからかも知れない。その成果は、幸いなことに本研究所の『文明』誌上に掲載させていただくことになった。これらは実は1990年代、小田原市史をはじめとして、南足柄市史、大井町史などの自治体史編纂にかかわり、地道に集めてきた史料、集計してきたデータを何とか公表したものであったが、これらはあくまでも基礎研究である。

改めていうまでもないが、東日本大震災以後も地震、噴火、台風、風水害、洪水等々連年のように何かしらの災害が続いている。その間、多くの文献や論文が発表されてきた。ざっと数えただけであるが、2012年から2019年の8年間で文献29冊、論文は157本にのぼっている。それ以前の大きなきっかけとなった1995年の阪神・淡路大震災を上まわる量である。それだけ一

般的にも関心が高いことを明示している。2012年に刊行された『日本歴史災害事典』では、文献が残る「歴史時代」に起こった災害に限らず、記録に残らない時代も、さらには自然災害だけでなく、火災や飢饉などの人為性の高いものを含め、それぞれの社会に大きな影響を与えた災害で、今後の防災上の視点からも社会に何らかの影響をもつ災害を「歴史災害」と総称している。また、防災だけではなく、「減災」という語も使われるようになってきた。そうした意味でも災害史研究の深化と進化は疑いようのないことであろう。近年では、大災害時はそれが巨大な非日常であるがゆえに、日常ではなかなか記録に表われない庶民の意識や願望が噴出するとして、鯨絵などの分析からそれらを読み解こうという北原糸子氏の研究や、復興過程における豪農などの役割を中間支配機構の視点から分析した渡辺尚志氏らの研究をはじめ、さまざまな視点からの研究が進められている。また、内閣府（防災担当）および中央防災会議では、研究者を集め、これまでの大災害の被害と復興について分析した報告書を作成している。それではこの上にさらに分析すること、検討することはあるのだろうか。あるのである。

ここでは1点だけ指摘しておきたい。先の『日本歴史災害事典』の付表にある災害年表をもとに分析すると、江戸時代の約260年間で、およそ252件の災害を確認することができる。このうち、地震が132件で圧倒的に多く、火山の噴火が43件、暴風雨・台風・洪水が52件である。地震の内、マグニチュード7.0以上と推定されるものは29件を数えている。また、これらを地方別に合計していくと、東北36件、関東56件、北陸23件、東海21件、中部24件、近畿24件、中国19件、四国9件、九州35件と、圧倒的に関東地方が多く、九州が続いている（北海道は除く）。ただし、両者の性格は異なっていて、関東では地震が31件と圧倒的に多く、九州では噴火が19件と多くなっている。また、全国あるいは諸国を横断するものは45件で、ここでは飢饉、旱魃、暴風雨などが多い。江戸時代に限るとはいえ、日本列島の災害の地域的な特徴を物語るものといえよう。

ただし、災害史としては比較的大きな災害に焦点が当たっていることは間違いない。もちろん、大災害はそれだけ課題も多い。例えば、私が研究テーマとしている富士山噴火では、被害の状況だけとって、被害直後の救済体制や、二次被害における山林被害など、まだまだ明らかにすべき課題は多い。それと同時にこうした地域的な差や自然災害と人為災害との関係等々、視野を広げてみれば、まだまだ明らかにすべき課題があることを痛感している。もちろん、二次災害を含む複合災害の構造も検討されなければならないだろう。それらの一つ一つが何を現代の我々に突きつけてくるのか。唐突ではあるが、やはり災害史の研究は、文明研究にとって不可欠な課題なのだと改めて考えてみたいのである。

東海大学文明研究所員
東海大学教育開発研究センター教授
馬場弘臣

〔参考論文・文献〕

- 宇佐美龍夫『新編 日本被害地震総覧〔増補改訂版〕』東京大学出版会（1996年）
北原糸子・松浦律子・木村玲欧編『日本歴史災害事典』吉川弘文館（2012年）
北原糸子『地震の社会史—安政大地震と民衆—』吉川弘文館（2013年）
渡辺尚志『浅間山大噴火』吉川弘文館（2003年）
馬場弘臣「元禄大地震と宝永富士山大噴火 その1—相模国小田原藩の年貢データから—」『文明』第19号（2014年）
馬場弘臣「元禄大地震と宝永富士山大噴火 その2—相模国小田原藩領村々の年貢割付状分析から—」第21号（2016年）
馬場弘臣「相模国小田原藩における大災害からの復興と改革・仕法—吉岡家の俸禄米をめぐって—」『文明』第23号（2018年）